

英語学習者の関係節の文法知識に関する調査報告

A survey report on grammatical knowledge of relative clauses in learner English

主 濱 祐 二

SHUHAMA Yuji

This brief article reports on a survey of grammatical knowledge of relative clauses acquired by adult Japanese-speaking learners of English as a foreign language. The learners' knowledge of functional morphology, syntax, and semantic interpretation as to relative clauses were investigated through three tasks in the survey. It provides suggestive data showing different kinds of relative pronouns and clauses easier or harder to acquire between lower- and upper-intermediate learners. These findings will lead to a further study based on a formal SLA theory.

キーワード： 関係節、第二言語習得（文法）、有生・非有生、格

Keywords: Relative clauses, Second language acquisition (grammar), Animate/inanimate, Case

0. はじめに

本稿は、外国語として英語を学ぶ日本人大学生の、関係節の文法知識に関する調査報告である。今回調査した文法知識は①形態、②統語、③意味の3種類で、それぞれ①適切な wh 関係詞の形態決定（適語補充）、②関係節を含む文全体の語順（語句整序）、③関係節を含む文の解釈（英文和訳）のタスクにより各文法知識を調査した。

関係節について形態・統語・意味の知識を取り上げるのは、この3種類の第二言語（second language, L2）の文法知識について、習得の困難さに差があると考えられているからである。例えば最近のL2習得仮説である「ボトルネック仮説」（Bottleneck Hypothesis, Slabakova 2016）では、形態の習得が最も困難であり、それが統語・意味・推論などの文法知識の習得の阻害要因であると仮定されている¹。統語に関して、補文標識の周辺（CP領域）で起こる文法現象についてはこの観点からの研究が進んでいないと思われるため、今回は関係詞や関係節を取り上げ、CP領域に関わる文法知識の習得について検討するための基礎資料を収集することにした。

1. 英語関係節に関する調査

英語の関係節に関する文法知識を観察するため、筆者の勤務校で英語を学ぶ日本人学生 88 名

を対象に簡易的な調査を実施した。学生 88 名の年齢は 19 歳から 22 歳までで、平均は 19.8 歳であった。2 ヶ月未満の英語圏への滞在経験者 5 名が含まれ、その 5 名を含む全員が主に日本で外国語として英語教育を受けている。英語力は英検レベル（級）を指標とした自己申告で把握し、88 名のうち 52 名を初級（英検準 2 級まで）、36 名を中級（2 級以上）として二分した。

調査する関係節の文法知識は、①形態、②統語、③意味の 3 種類である。①の形態の知識とは、特に機能範疇に関する形態（functional morphology）を指し、今回の調査では wh 関係詞の適切な形態の決定が問題となる。②の統語知識は、関係節内の語順や関係節を含む文全体の語順を問うものである。③の意味に関する知識については、関係節とそれを含む文全体を正しく和訳し解釈できるかで判断した。

調査は形態（4 問）、統語（3 問）、意味（3 問）の知識を問う計 10 問からなり、15 分間で参加者に一斉に実施した。以下、設問カテゴリごとに問題と回答を示していく。

2. 形態の知識

関係詞と関係節に関する設問は下に示す 4 つで、各文の空所に適切な wh 関係詞を補うタスクであった。

1. I know a shop (wh) sells good meat.
2. The movie is about children (wh) mother has cancer.
3. A photo of the castle (wh) I stayed with my friends was on SNS.
4. The nurses (wh) I see every Monday always make a joke.

正答と正答率を表 1 に示す。

	正答	正答率（全体）	正答率（初級）	正答率（中級）
1.	which	61.4%	61.5%	61.1%
2.	whose	38.6%	34.6%	44.4%
3.	where	34.1%	23.1%	44.4%
4.	who(m)	81.8%	88.5%	83.3%

表 1 タスク 1（形態）結果

まず正答率が最も高い 4 を観察する。中級で whom が 6 例あった以外は、正答はすべて who であった。who(m)と回答するには、先行詞が有生（animate）であると知らなければならない。正答率の高さから、この知識は習得されやすいと考えられる。ただし、格の知識、つまり関係節との格の関係（例 対格：the nurses who(m) I see ACC__ every Monday ...）については、習得されているかどうかはここでは判断できない。

4 の有生性を踏まえ、次に 1 を見よう。1 の正答は **which** で、4 より正答率が約 20% も低い。先行詞 **a shop** は非有生 (*inanimate*) であり、**which** と簡単に察しがつきそうな気がする²。1 の正答率がそれほど高くないのは、誤答に **where** が多いからである (20 例、全体の 22.7%)。格の関係を見ると、**a shop** は関係節で主格であるため (**a shop which** NOM ___ **sells good meat**)、適切な関係詞は **where** ではなく **which** となる。このことから、関係詞を決める上で必要な格の知識は十分に習得されていないと推測される。

2 と 3 ではさらに正答率が下がり、初級と中級の差も開いていく。2 では先行詞が有生で属格という知識が必要だが (**children whose (=their) mother has cancer**)、誤答の多くを **who** が占めている (32 例、全体の 36.4%)。ここでも格の知識は利用できず有生性のみで回答する傾向がうかがえる。3 も同様に、**the castle** の非有生性だけで **which** と答えることはできず、先行詞が関係節内で副詞句 (または付加詞 (*adjunct*)) であることを構造的に把握していなければ **where** と答えられない (**the castle where I stayed** ADJ ___ **with my friends**)。誤答 **where** の回答数は 44、全体の 50.0% を占めた。

3. 統語の知識

関係節の統語知識に関する設問は 3 つあり、空所を補う語句整序のタスクであった。

- | |
|---|
| <p>1. _____ has over 30,000 words.
yesterday / the dictionary / I / that / bought</p> <p>2. A close friend is _____.
can / trust / who / you / someone</p> <p>3. Many _____.
that / speak / people / in Mexico / Spanish / live</p> |
|---|

正答と正答率を表 2 に示すが、表の見方を説明しておきたい。正答欄には模範解答に加え、(...) で実際の回答に多く見られた別解を示してある (ただし、可能な語順だが 2 や 3 のように意味が自然でないものも含まれる)。正答率欄の上段は模範解答の正答率、下段は模範解答と別解を合わせた場合の正答率である。

全体的に正答率は低く、別解を含めても 6 割程度に留まっている。初級で最も正答率の高い 2 を見ると、有生の先行詞 **someone** に **who** をつなげ、その後 **SV** (主語・動詞) と英語の基本語順を続けられることから、他の設問に比べ答え易かったのではないかと推測される。

正答	正答率 (全体)	正答率 (初級)	正答率 (中級)
1. the dictionary that I bought yesterday (yesterday I bought the dictionary that)	15.9% (45.5%)	15.4% (38.5%)	16.7% (55.6%)
2. someone who you can trust (someone who can trust you)	20.5% (61.4%)	46.2% (61.5%)	33.3% (61.1%)
3. people that live in Mexico speak Spanish (people that speak Spanish live in Mexico)	20.5% (31.8%)	11.5% (23.1%)	27.8% (38.9%)

表2 タスク2 (統語) 結果

1と3では初級・中級とも正答率がさらに下がり、別解を含む正答率(括弧内の数値)も合わせて比べると中級の方が正答率が高い。2と、1および3の設問で大きく異なるのは、2では文の後方の補語部分に現れる関係節の語順が問題なのに対し、1と3では文の前方の主語位置に現れる関係節が問われている。また、1と3では、タスク1の回答への影響を避けるために、wh関係詞でなくthatが用いられた。この2点も正答率に影響する要因ではないかと思われる。

1の設問を見ると、空所のあとに述語動詞のhasが続くことから、「空所にはhasの主語になる名詞句が来るだろう」という見通しが立つ(The dictionary that...)。しかしこの予測に反して、回答ではYesterday I...やI bought...など、Iを主語にした文の形が多く見られた。従って、文頭の空所において英語の基本語順の知識(SVO(M), (M)SVOなど)が優先され、構造的に複雑な名詞句が想起されなかったか、あるいは産出レベル(ここでは語句整序)でまだ習得されていないと考えることができる。

3の設問は冒頭にManyしかヒントがなく、主語名詞句の組み立てと述語動詞の位置に関する知識が問われる点で1より難しい。Many peopleまでは易しいが、その後thatが来るかlive/speakを置くかで大きく回答が分かかれ、誤答のほとんどは后者であった(例 Many people live in Mexico that speak Spanish.)。やはりここでも、英語の典型的な語順の知識が過剰に影響していると思われる。

4. 意味の知識

意味解釈に関する設問は3つで、関係節を含む文を意識でなく可能な限り正確に和訳するよう指示された。

1. Is the book that you are reading interesting? (正答：[あなたが読んでいる本] はおもしろいですか)
2. The girl who I work with gave me a present. (正答：[私が一緒に働いている女の子] が私にプレゼントをくれた)
3. The year when he was born is not known. (正答：[彼が生まれた年] は知られていない)

点検項目と正答率を表 3 に示す。

項目	正答率 (全体)	正答率 (初級)	正答率 (中級)
1-1. 関係節	63.6%	57.7%	66.7%
1-2. 文全体	68.2%	65.4%	72.2%
2-1. 関係節	63.6%	53.8%	77.8%
2-2. 文全体	72.7%	61.5%	83.3%
3-1. 関係節	65.9%	50.0%	77.8%
3-2. 文全体	56.8%	42.3%	72.2%

表 3 タスク 3 (意味) 結果

この 3 つの設問では、関係節と名詞句の関係が正しく解釈できているか、さらに関係節を含む文全体の意味が理解できているかを和訳から確認した。例えば 1 で言えば、the book that you are reading の部分を解釈できるか (上の正答の [...] の部分)、そして Is ~ interesting? が全体として「~はおもしろいですか」という Yes/No 疑問文として捉えられているか、2 段階で理解度を確認するということである。上の表では、前者は項目 1-1 の「関係節」、後者は 1-2 の「文全体」として正答率を示した。全体的な傾向としては 6 割前後の正答率で、どの項目でも中級レベルの方が初級より理解度が高い。他の設問カテゴリ (①形態、②統語) に比べて、関係詞や文の種類の違いによる影響はあまりないと思われる。

the book that you are reading ___, the girl who I work with __, the year when he was born ___ が、疑問表現 (誰、いつなど) でなく名詞句として把握できているかが意味解釈のポイントである。様々な解釈が観察され、回答の共通点を抽出できなかつたため、誤答から数例紹介することにする。

- ・ [あなたが興味深く読んだ本]はこれですか (interesting も含めて修飾)
- ・ この本はあなたにとって面白いですか (関係節部分を訳出しない)
- ・ その少女は私と一緒に働いてプレゼントをくれた (the girl の修飾が不明瞭)
- ・ [彼がその年に生まれたこと]を知らない (「~こと」、受身の誤訳)

- ・ [彼がいつ生まれたのか]は知られていない (the year が訳出されていない)

全体的な正答率の傾向から言えるのは、関係節の意味解釈の精度が高まると、それを含む文全体の解釈も正確になっていることである。先行詞と関係節を正確に訳出できるようになると、名詞句の範囲が決まり、その文法役割（主語、目的語など）が明確に把握できるためだと考えられる。なお、3 について、3-2 文全体の正答率が低めなのは、上述の誤訳例にもあるように、受身表現の *is not known* を訳出できなかったことによる。従って正解率の低さから関係副詞 *when* を含む文の意味を構造的に把握できていないとは結論づけられない。

5. 調査結果のまとめ

最後に、今回の調査から得られた、初中級英語学習者の関係詞に関する文法知識の特徴についてまとめておきたい。

まず形態の知識については、関係詞の種類を決定するには先行詞の有生性／非有生性、さらに先行詞が関係節内で付与される格の情報が不可欠である。正答率と誤答傾向から、有生性・非有生性と関係詞との関連付けは容易に習得されるのに対し、格の情報との関連付けは習得されにくく、中級と比較すると初級レベルでは著しく困難であることが確認された。

次に統語（語順）の知識に関しては、まず語句整序には当然ながら英語の基本語順（SVO）の知識が強く働くが、その際に名詞句を関係節化する知識はあまり活用されない（あるいは習得が不十分である）。関係詞の種類や統語環境の要因も考えられ、*who* よりも *that*、文の後方（補語など）よりも前方（主語）の方が関係節の産出が困難である。

意味の知識については、他の形態・統語タスクよりは正答率がよいため、先行名詞句と関係節のまとまりはある程度把握できていたと思われる。関係節化された名詞句の範囲を把握する精度に比例して、文全体の意味解釈の正確さも高まることも分かった。

最後に今後の展開を簡潔に述べて報告を終わりたい。英語の関係節は機能範疇 C が関与する構文であり、その言語処理には様々な素性が影響すると考えられる。類似する日本語の構文は「太郎が描いた絵」のような連体修飾節であるが、この構造は村杉(2014)によると C を伴わない TP であると仮定されている。従って日本人英語学習者は母語で用いない C に関する素性や CP の投射を関係節の習得の際に活性化・構築していく必要があり、これはボトルネック仮説をはじめとする形式文法系の第二言語習得理論でそのプロセスを解明できる余地が十分にあると思われる。このアプローチでデータの再整理と補充をさらに進め、英語の関係節の文法知識とその習得過程について稿を改めることにしたい。

注

- 1 ボトルネック仮説では、機能範疇に存在する形式素性が形態素等で具現化されうるかが L2 習得上の最大の障害であり、それが克服されれば統語・意味処理は容易に可能になっていくと考えられている。詳細は Slabakova (2016), 特に Chapter 13 を参照。
- 2 インフォーマント (アメリカ英語母語話者) に確認したところ、shop や restaurant が先行詞のとき、その場所に関わる従業員等を想起し有生の関係詞 who を用いて修飾することはまずないという。

参考文献

村杉恵子. 2014. 『ことばとところ—入門心理言語学』東京：みみずく舎

Slabakova, Roumyana. 2016. *Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.